
Red Boy

金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Red Boy

【NZコード】

NZ8521C

【作者名】

金

【あらすじ】

母のいない綾子の、不器用なラブストーリー。

母はわたしが五歳のとき「亡くなつた。

まだ二十五歳と若く、至つて健康だった彼女の死を誰もが悲しみ、涙を流していたらしい。

寝顔のような母の顔を、今でも忘れられない。

「十一年経つた今、優子さんからわたしに手紙？」

「うそ、ずっと言われてたんだ。綾子が十七になつたら渡してくれつて」

「こいつ、優しく笑い父は振り返る。

「透さんは中身、見た？」

「まさか。優子さんのことだからね」

見てなによ、と呟つた。

わたしは父を透さん、と呼び、母を優子さんと呼んだ。それはわたしが物心ついた頃からのだからね愛称でもある。

「読まなきやダメ？」

「読みたくないの？」

「なんとなく、ね

手紙とは言えないような分厚い紙を、わたしは両手で包んだ。
少し紙は汚れ、黄ばんでいて、十一年という日日を感じさせぬことは
十分だつた。

「優子さんからひらひらした言葉、一つしか覚えてないの」

「なに、教えて？」

「原稿の締切に間に合つたら、教えてあげるわ」

ソファーから立ち上がり、透さんの肩を軽く叩く。
すると透さんは思い出したような

「あ！」とした声を出す。

「忘れてたよーもつこんな時間だ！」

「ほら早く部屋行って、小説書く」

父は勢いよく頷き、作りかけのビーフシチューのおたまをわたしへ
と渡した。そして部屋兼書斎に駆け込んでいった。

「全く、世話が焼ける父親だ」

笑いながらため息をつき、おたま片手にもつ一度、手紙を見つめる。

「…優子さんからの」

手紙。

いつも笑顔で、子供のような人だった。
わたしとよく透さんに悪戯をしていました。
コメディアンのようで、八方美人で、寂しがり屋で、
とても美しかった人。

わたしの母は、有名な女優だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521c/>

Red Boy

2011年10月4日11時27分発行